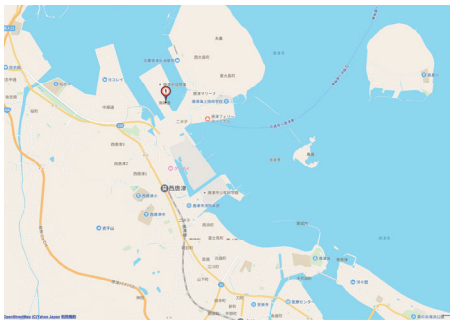
全海運所属組合の横顔
連載　第６回
九州地方海運組合連合会
その７　佐賀県海運組合

【組合の概要】

事　務　局	〒747-0873 佐賀県唐津市海岸通 7182-214 魚舎上屋２階 電話 0955-72-2530　FAX 0955-53-8125 JR『西唐津』駅より昭和バス 10 分 「魚市場入口」下車３分		
理　事　長	宗田　銀也　旭海運㈲代表取締役		
事務局長	吉田　省三		
組合員数	運送事業者		２社
	貸渡事業者		19 社
	合　　計		24 社
所属船腹量	貨物船	27 隻	26,450 重量ﾄﾝ
	LPG 船	２隻	1,973 ㎥
	計	29 隻	18,4123 重量ﾄﾝ㎥



事務局のある唐津港付近（Google 地図）

宗田理事長（左）と吉田事務局長

事務局が入居する建物（上）と事務局

【組合の概要】

全海運の地区組合は元々、船どころ単位で生まれその後、統合や分離を経て現在に至っているが、佐賀県海運組合は誕生から今日まで、県下一円を網羅した唯一の海運組合として存在しており、全国的にも希有な例といえる。

佐賀県下には、重要港湾として唐津港（佐賀県唐津市）と伊万里港（佐賀県伊万里市）の２港、地方港として玄界灘側にある星賀港（唐津市肥前町）、仮屋港（唐津市肥前町・玄海町）、呼子港（唐津市呼子町・鎮西町）と有明海側にある鹿島港（佐賀県鹿島市大字常広）、住ノ江港（佐賀県許島郡白石町）、諸富港（佐賀市諸富町）、大浦港（佐賀県藤津郡太良町）の７港があるが、内航海運事業者は後述のように星賀港周辺に集中している。

地方港の概要から佐賀県の内航海運に触れよう。星賀港は県北西部（肥前町）に位置し、その前面を鷹島（長崎県）に閉ざされ静穏な港で、長崎と北部九州各地を結ぶ重要な海上ルートである日比水道に面し、古くから貨物船の寄港地として利用されて来た。石炭産業の全盛期には背後地から多

くの石炭が積み出され、100 隻を越える貨物船がここを母港として活躍していた。現在ではこれらの船はみられないが、内航海運事業者が多いのはその名残である。現在の星賀港は、一本釣り漁業を中心とした沿岸漁業の基地として地域を支えている。

事務局入口（左）

仮屋港は、仮屋湾（玄海町、肥前町）の湾奥部に位置する静穏な港で、昭和 9 年（1934）、大鶴炭鉱（唐津市肥前町）で石炭の採掘が始まると荷役機械が設置され、石炭積出し港として賑わいをみせていたが、昭和 32 年（1957）の炭鉱閉山とともに港勢は低下した。現在は、真珠養殖業を中心とする水産業の基地として利用されているが、水産業だけでなく、今後は建設用石材の需要にも対応できる埠頭として、佐賀県により施設整備が進められている。

住ノ江港は、1 級河川六角川の下流部に出来た河川港で、有明海に面した日本有数の穀倉地帯の佐賀平野にあり、農水産業が基盤となっている。古くは杵島炭鉱からの石炭積出港として栄えたが、石炭産業の衰退後は有明海の浅海域養殖業の発展に伴い、水産基地へと生まれ変わっている。

この他、東松浦半島の北端に位置する天然の良港の呼子港は、古くから玄海漁業の基地、離島航路の基地だった。有明海に注ぐ石木津川河口の鹿島港は、有田焼の原料である天草陶土の荷揚げ等により活況を呈していたが、近年では海苔や貝類等、浅海域養殖業が発展。諸富港は県の南東部にあり、藩政時代に筑後川を隔てて福岡に面する有明海に面した唯一の港として隆盛を極め、明治初期には商船学校も設置されていたが、近年では浅海域養殖業の発展が著しい。県の最南端で長崎県との県境に位置する太良町の大浦港は、背後地から良質の石材が産出されることで、古くから有明海沿岸の干拓事業の石材積出港として栄えたが、現在では有明海とともに生きる農林漁業が基盤で、観光拠点ともなっている。

【佐賀県の内航海運】

佐賀県海運組合の事務局は、JR『西唐津』駅より昭和バスで 10 分「魚市場入口」下車徒歩 3 分、唐津湾に突き出た大島の手前左側にある突堤を入ってすぐの魚舎上屋 2 階にある。付近には国立唐津海上技術学校、壱岐島・印通寺（いんどうじ）行のフェリーが発着するターミナル、唐津魚市場がある。また、大島には市民の森公園があり、ウォーキングコースの小高い丘を頂上まで進むと、唐津市街地や玄界灘を一望出来る展望台もある。ここからは見通しがよければ、九州本土 600km 沖の玄界灘に浮かぶ宗像大社の神領「神宿る島」沖ノ島（福岡県宗像市。世界文化遺産）もみることが出来る。

唐津市は玄界灘に面した静穏な港町で、古くから大陸との交流が盛んな地でもあった。地名は大陸を意味する「唐」と、港を意味する「津」から「唐の津」と称されたことに由来しているといわれる。市内南西部の菜畑（なばたけ）遺跡は、縄文時代前期から弥生時代中期にかけてのものとされ、現在確認出来る範囲では日本最古の遺跡である。中でも水田跡は日本で最初に稲作が伝来した場所とされており、ここから大陸の文化も取り入れられたと考えられている。

佐賀県の北西部に位置する唐津市と東松浦郡玄海町に広がる台地には、豊臣秀吉による文禄・慶長の役（1592 ～ 1598）の朝鮮出兵基地である名護屋城跡と、集結した諸大名の陣跡

が国の特別史跡として保存されている。ここには朝鮮出兵当時、全国から20万人を超える人々の集う城下町が出来たとされる。

また、この戦役では遠征した大名により、朝鮮半島から多くの人々が日本に連れて来られ、その中の優れた技術を持つ陶工が九州各地で製陶を根づかせた。佐賀県を代表する唐津焼、有田焼、鹿児島県の薩摩焼なども彼らが作り始めたといわれている。

唐津港は、江戸時代後期に石炭を積み出すための港として松浦川河口部に開かれたが、荷役の不便さや唐津鉄道の開通から、明治30年（1897）頃に港の中心が西港（現在の大島・妙見地区）へ移され明治、大正期は全国でも屈指の貿易港として発展した。また、唐津港は第2次世界大戦前後を通じて唐津炭田、許島（きしま）炭田を背後地に、我が国屈指の石炭積み出し港として繁栄したが、「木船による石炭その他雑貨物の運送・斡旋、組合員の福利厚生に関する施設の充実を主な事業」を目的に唐津地区機帆船輸送協同組合が設立されたのは、そのさ中の昭和28年（1953）5月だった。現在の佐賀県海運組合の前身である。北九州地区を中心とした石炭輸送主力の機帆船組合設立は、昭和23年（1948）頃がピークで、唐津は後発ながら当時の佐賀県海運界発展に欠かせない重要な組合として隆盛を極めた。

同時期佐賀県下では他に、地区別の任意団体の星賀海運協同組合（唐津市肥前町）、筑後川砂利採取販売船舶協同組合（佐賀市）、藤津機帆船運送協同組合（藤津郡）の3つの協同組合が設立されている。

唐津港

唐津港は、昭和26年（1951）に重要港湾に指定された後、石炭の積出し及び工業開発を骨子とした港湾計画に沿い、施設の整備が進められた。しかし、昭和30年代に入ると、エネルギー源の主役に台頭して来た石油の進出を受けて凋落の一途を辿り、唐津港を拠点とする石炭船は次々と姿を消し、港勢は著しく衰えた。

昭和33年（1958）5月、小型船海運組合法に基づき唐津地区機帆船輸送協同組合を母体に唐津地区海運組合が設立され、3協同組合はその傘下となった。唐津地区海運組合は、昭和39年（1964）7月の内航2法施行により現在の体制となり、平成27年（2015）5月に佐賀県海運組合に名称変更されている。

唐津港は昭和30年代後半以降、石炭偏重からの脱却を課題として電力、石油等のエネルギー企業を積極的に誘致する一方、昭和42年（1967）からは妙見地区の公共埠頭整備と工業用地造成に着手するなど、本格的な臨海部の開発を始めた。現在では、これらの公共埠頭や工業用地がＬＰＧや建設資材などの物流基地となり、県北部の拠点として重要な役割を担っている。

唐津港はその後、平成19年（2007）4月に就航した壱岐フェリーの埠頭を中心に、隣接する緑地を一体的に整備するとともに、アメニティの高い快適な港湾空間創出のため、再開発を核とした唐津湾ウォーターフロント整備、臨港交通体系の充実などを推進し、物流・生産・レクリエーション機能を有する総合的な港湾の形成を図っている。

唐津港と並ぶ重要港湾の伊万里港は、伊万里湾の湾奥部に位置し、周囲を東松浦、北松浦の両半島と福島（長崎県）に囲まれた天然の良港で、港の最奥部に伊万里川と有田川の2河川が注いでいる。このうち伊万里川河口部からは、鍋島藩時代に多くの焼物が遠くはヨー

ロッパまで積み出され、「古伊万里」としてその名を知られている。伊万里港は唐津港同様、昭和初期から昭和30年代にかけて石炭の積み出しが盛んで、港湾施設の整備も積極的に進められたが、石炭産業の衰退とともに 港勢も低下したため、佐賀県が産炭地域振興計画の中で工業開発の拠点として位置づけ、工業用地の造成、公共埠頭の整備を進めた。

現在、久原北地区では石炭、砂利・砂等の貨物が取り扱われ、また、久原南地区では、独立行政法人中小企業基盤整備機構による伊万里団地約120㌶が造成されたことにより水産や木材関連企業、半導体の大手企業等が進出している。また、七ツ島地区には佐賀県による七ツ島工業団地（約150㌶）が造成され、名村造船の他、各種温度差発電関連の企業が進出している。平成9年（1997）4月には、韓国釜山港との間に国際コンテナ定期航路が開設されたが、以後外航定期航路は拡大され、現在は中国航路を含めて4航路（週6便）が運航し、平成27年（2015）10月から井本商運が神戸港経由で、国際フィーダー航路を週1便運航している。伊万里港は、九州の北西部に位置し、朝鮮半島まで約200kmと至近距離にあり、アジアの時代にふさわしい東アジア、東南アジアへのゲートウェイとして期待されており、公共埠頭の整備拡充、航路・泊地の確保、臨港道路の整備等が進められている。

臨港道路久原・瀬戸線は、港の東西を結ぶ道路が平成15年（2003）3月に供用開始されており、全長651ｍの伊万里湾大橋は地域のシンボルとなっている。また、七ツ島北地区では平成25年（2013）4月に-13ｍの岸壁の整備とガントリークレーンを設置し、供用を開始した。さらに、平成28年（2016）4月からトランスファークレーン3レーンが供用を開始し、荷役作業の効率化やコンテナ船の大型化への対応が図られた。

伊万里港は、平成22年（2010）8月に国の港湾整備事業の着手対象となる「重点港湾」の指定を受け、さらに平成23年（2011）11月には、国際海上コンテナの「日本海側拠点港」に選定されており、北部九州の物流拠点としての役割が期待されている。

唐津海運組合の組合員は、令和2年（2020）4月1日現在20社で、業種別にみると運送業が2社、貸渡業が18社。所在地でみると唐津市に17社が集中しており、そのうち星賀港のある肥前町星賀町が7社で、伊万里市には組合員がいない。

かつては石炭以外にも、地元から出荷される木材の輸送に従事する内航船もあったが、現在では組合所属船舶の大半が中央のオペレーターに所属して京浜、阪神、北海道方面の海上貨物輸送に従事しており、地元に拠点がない。また、以前は筑後川流域の川砂採取に従事していた組合員や、藤津地区の組合員もいたが、現在では全て廃業している。所属船舶は令和2年4月1日現在で29隻、28,423重量㌧㎥で、そのうち貨物船は27隻、26,450重量㌧を占めており、ＬＰＧ船が2隻、1,973㎥ある。

唐津地区海運組合は理事長1名、副理事長2名、理事4名、監事2名の役員構成。宗田銀也理事長（旭海運㈲社長）は平成21年（2009）6月に就任した。祖父の代からの海運業で、大学卒業後に東京で油送船オペレーター平和汽船（のち上野トランステック㈱に統合）の営業部に勤務した。組合事務局は吉田省三事務局長がひとりで切り盛りしている。吉田事務局長は、税務会計会社の出身で、友人の宗田理事長に誘われて5年前現職についた。

組合の活動は活発で、総会と理事会の他、船員対策委員会を設け、地元の唐津海上技術学校と日頃から接点を持ち、唐津ケーブルテレビに働きかけて内航海運のＰＲや船員職業の紹介などにも積極的につとめている。

【海にまつわる神社】

唐津神社

唐津神社の白い鳥居（左）と海上安全の御守護札

唐津市の中心街にある唐津神社は、入り口にそびえる白い鳥居が象徴的である。祭神は海の神である底筒之男命、中筒之男命、表筒之男命の住吉三神。『古事記』によると、神功皇后が新羅征伐に向かった折、水軍の進むべき航路に迷い住吉三神に祈願すると、たちまち海上に光り輝く航路が現れて導いたという。戦わずして新羅、高麗、百済の三韓を従わせて凱旋した神功皇后がご神徳に感謝して唐津の松浦海浜に宝鏡を懸けて住吉三神を祀ったのが唐津神社の創始とされている。天平勝宝７年（755）、領主の神田宗次が神夢により海浜に赴くと、漂着して来た宝鏡入りの筐（竹製の籠）を得たので、神功皇后の捧げた鏡であろうと帝に奏聞したところ、「唐津大明神」の称号を賜ったという。文治２年（1186）、宗次の後裔を称する神田広が社殿を造立して神田宗次の霊を合祀し、祭神に加えたという。慶長年間（1596～1615）に寺沢広高が唐津藩初代城主として唐津城を築いて入府すると唐津神社を再建、以後唐津藩主の祈願所と定められ、崇敬を受けたとされる。

住吉三神とは、日本全国に約600社ある住吉大社や住吉神社の祭神で、唐津神社の他に三韓征伐に由来する神社としては住吉大社（大阪市住吉区）、住吉神社（山口県下関市）、住吉神社（福岡県博多区）の三大住吉の他、住吉神社（長崎県壱岐市）、風浪宮（福岡県大川市）、本住吉神社（神戸市東灘区）がある。

『日本書紀』によれば伊弉諾尊は、出産がもとで亡くなった伊弉冉尊を呼び戻そうと黄泉の国へ赴いたが、「視るな」の禁を犯したため、腐乱して変わり果てた伊弉冉を発見してしまい、驚いて追行をかわして逃げ戻り、生死の境界線である黄泉比良坂を千引の岩と呼ばれる巨岩で道を塞いだ。伊弉諾は黄泉の穢れを海の底に沈んで濯いで清めたが、その「禊祓」によって誕生したのが住吉三神だった。住吉三神は海そのものを表し、天皇家の航海安全の守護神として祀られたのだった。ちなみに住吉大社、住吉神社では、住吉大神（または住吉明神）として住吉三神の他に、神功皇后も息長帯比売命として祭神に祀ることが多く、戦いの勝利や航海の安全にご利益があるとされていることから、海上安全の祈願に訪れる人が多い。

「唐津くんち」の引山（写真提供：PIXTAS）

巨大な引山を笛、太鼓、鐘の囃子にあわせて曳子達が掛け声とともに唐津市内を巡行する「唐津くんち」は、唐津神社の秋季例大祭である。「唐津くんち引山行事」は国の重要無形民族文化財であり、ユネスコ無形文化遺産に登録されている。豪華な漆工芸品の引山14台は通常、唐津神社に隣接した引山展示場に展示されている。